どんな1年だった？

Green Valley 2023 ハイライト！

神山アーティスト・イン・レジデンス

「4年ぶりの通常開催」2023年は何度もこの言葉を繰り返しました。春には「3年ぶりの選考会」、そして2019年以来のイベントも多数開催しました。アーティストが神山を拠点に生活し、制作やプロジェクトを展開していく視点や時間を、この地域特有の景色や建造物の中で見る事、体験する事はその度に新鮮で、変わらない KAIRの大きな特徴です。今年度も地域の人々と交流しながら作られる唯一の空間を、多くの人に開かれた場として、共有する事が出来たのではないでしょうか。

Kamiyama Artist in Residence 糸井えり

移住交流支援センター

2023年は2月に宅地建物取引業の免許を取得し、まちの不動産屋さんとして移住交流支援事業に取り組みはじめた節目の年でした。とはいえ、空き家相談、移住相談を一件ずつマッチング、契約を仲介して、空き家の荷物片付けをお手伝いするという、これまでのやり方は変わりません。不動産業をコツコツ続けるなかで、自分たちで空き家を改修したり、神山杉を使った家を新築したり、神山らしい住宅プロジェクトができないかなぁと、妄想を膨らませています。

移住交流支援センター 伊藤友宏

ほんのひろば

今年は神山の方に特に多くのご寄付をいただき、私たちの7年の活動が少しずつ町にも届いているなと実感しています。今年、広野小旧校舎の「コーヒーとほんのひろば」が、広野小の学校サポーターに任命され、児童がほんのひろばを訪問し読み聞かせを聞いたり本を手に取ったり、町民が本にふれる新しい場を始める事もできました。また移住事業の空き家整理で集まる郷土史料の保存も地道に進めています。今後も丁寧にまちの読書環境を整え、届け、郷土資料を活用した活動にも力を入れたいです。

農村環境改善センター／ほんのひろば 河野定子

農村環境改善センター

今年はコロナも嘘のように明けて、まちの活動が活発になった一年でした。たくさんの人に使っていただくと、施設のメンテナンスにも力が入ります。私の中で今年一のニュースと言えば、一階トイレ前の天井が直ったこと！天井から長らく漏水があり、修繕のためにその一部を剥がしていました。この傷は施設が40年頑張ってきた証で、時間をかけてようやく綺麗な姿に戻り、これまでコツコツと施設を管理してきた苦労が喜びに変わる瞬間でした。

農村環境改善センター／ほんのひろば 河野定子

地域住民で守る里山保全

ぴーちゃんです。西青井夫の杉林を整備し枯れていた水源から年間通して水が出るようになりました！手順としては、まずは倒木を40～50 cm に玉切りをして、背負子で根気よく運び出します。そして土砂や石、枝などを取り除きます。次に周りの弱った杉を間伐し、運び出します。光と風が入ると、いろんな植物が生えてきます。「森のようちえんねっこぼっこ」のみなさんが、どんぐりを撒いてくれたので、春に芽吹くかどうかが楽しみでなりません！

オニヴァ山 ぴーちゃん

※ぴーちゃんはグリーンバレー理事 斉藤郁子さんが育てている鶏です。

神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス

たくさんの新しい出会いに恵まれた一年でした。就職、プロジェクトをきっかけに神山に移住した方、通われる方、今までコンプレックスと接点のなかった神山暮らしの先輩たち、神山校生、元神山塾生、地元のおじいちゃん、などなど。人が人を呼び、様々な出会いや交流の場になっていたと思います（新規契約：8件、今年度のべ利用者数：約3400名）。2024年も、まちのみんなにとってより良い場所になれるよう、頑張ります！

神山バレー サテライトオフィス コンプレックス 後藤涼介 安達優香

森づくり事業

毎月大粟山の手入れをしています。みなさんも一緒に活動しませんか？

理事長コラム VOL.3

理事長　中山竜二

だいこんとほうれん草をお土産に。

お百姓さんが野菜を次々抜いていく絵本がある。葉っぱの絵を上にめくると野菜が現れる。「すっぽーん、ニンジンさん」「ずっぽーん、だいこんさん」。もうすぐ2歳になる息子のお気に入りだ。

都会暮らしのころ、畑や果樹に囲まれた暮らしに憧れた。自分の「人生の楽園」をつくろうと45歳で神山に移り住み、手当たり次第に野菜を育てて楽しんだ。でも神山で暮らしていると、なぜか忙しくなっていく。梅の加工品の販売、カフェのオープン、民宿の仕事も面白い。カヤックで川下りしたり、バイクにも乗りはじめた。神山ワンダーランドが楽しすぎて、家のことは後回しにしてきたのだ。

再婚を機に生活は急変する。男の子と女の子を授かり、自然と家の周りで過ごす時間が増えた。草ぼうぼうの畑は、我が家の負債だったが、いま資産に戻りつつある。絵本と同じことが、家の前でできることを思い出したのだ。柿とイチジクの苗を植えてみた。桃や栗、みかんも植えてみよう。

100歳時代がホントなら、「65～75歳くらいを人生の絶頂期」に設定してもいいのかも。還暦のオッサンは思う。

メンバーリレー

中川麻畝

はじめまして。2023年4月から移住交流支援センターの担当になりました、中川麻畝（なかがわまほ）といいます。出身は、神山町下分です。グリーンバレーがきっかけで、また故郷に帰ってくることができました。久しぶりの神山生活を毎日噛み締めています。そんなUターン生活のホットトピックは、小学生ぶりにはじめた人形浄瑠璃。人形浄瑠璃とは、日本の伝統芸能の一つで、神山町には170年以上続く歴史深い人形座「寄井座」があります。私が小学生の頃、ちょうど子ども版人形座「すだち座」がはじまり、寄井座の皆さんにご指導いただきながら活動していました。小学校卒業と同時にすだち座も卒業してから13年。いつか大人になって神山に帰ってくることができたら、また浄瑠璃をやりたい！そんな思いが、こんなに早く叶うだなんて。今は、小学生の時に教えてもらった方々にまた指導してもらいながら、練習を楽しんでいます。寄井座は、毎週土曜日20時から、神山温泉すぐ横の練習場で稽古をしています。誰でも見学大歓迎。座員も絶賛募集中。お気軽にお越しください！

ご寄付のお願い

会員の皆様、いつもグリーンバレーの活動をご支援いただき、本当にありがとうございます。今号の特集の通り、私たちは今、山あり谷ありの道中ながら、新しい組織づくりを進めています。そしておかげさまで、来年度には2004年の設立から20周年を迎えます。さらに、大粟山の森づくりも20周年、神山アーティスト・イン・レジデンスは25周年となります。私たちは、これからも「日本の田舎をステキに変える！」をミッションに、神山の可能性を見つめ、面白く活動を続けてまいります。引き続き、ご支援のほど何卒よろしくお願いいたします。

寄付の申し込みフォームへ移動します。▶

編集後記

なんと前号の発行から一年以上経ったそうです…。時間が経つのは早いですね。「この一年グリーンバレーどうしてた？」ときっとみなさん思われていたのでは。実は色々あり、今号はその一部、「新体制」についてお届け。「なぜ新体制に？これからどうなっていく？」そんなテーマでしたが、それ以上に「特別」ではない、「日々のグリーンバレー」を文字にしてお届けできたのかなと思っています。どうぞ各担当者のハイライトと合わせてお楽しみ下さい！（安達）

外部メンバーとして当機関紙の制作に関わってきた私。対談は一見物静かな空気でしたが、今の神山町の礎を作ったともいえるこの組織の世代交代をしていくという、黎明期のワンシーンだったに違いありません。先が見えないまま前の走者からのバトンを受け取った新しい理事たちの心持ちやこれまでの地域での出来事に触れていくと、2時間の対談は私には神山のショートムービーのようでした。その名の通り地域に根ざしたチームだからこそ、まちや人との関わり方はこれからさらに多様化していくのでしょう。楽しみです（小林）

表紙写真　『上分中津雪景色』

上分「中津の満月イチョウ」から谷のほとりを見下ろすと、中津の集落がすっぽり眼の前に収まる。背後には、太古の昔から信仰の対象である焼山（現在の焼山寺山）がそびえ、その威堂々とした御姿に自然と手が合わさる。（生津勝隆）

編集部

企画・構成　GREEN VALLEY JOURNAL 編集部
デザイン　小林幸（幸デザインスタジオ）
写真　生津勝隆

発行・お問合せ

認定特定非営利活動法人グリーンバレー
〒771-3421　徳島県名西郡神山町下分字地野 49-1
TEL：088-676-1178
Email：greenvalley@in-kamiyama.jp

GREENVALLEY JOURNAL vol.18

認定 NPO 法人グリーンバレーに携わる人たちの想いを伝えるニュースペーパー

20th ANNIVERSARY

GREENVALLEY JOURNAL

グリーンバレージャーナル

vol. 18 February 2024

特集

20年目のチームづくり

20年目のグリーンバレー
新体制、はじまる！

話し手：作田祥介（事務局長）、伊藤友宏（移住交流支援センター）、工藤桂子（KAIR）
聞き手：安達優香（コンプレックス担当、編集見習い）、小林幸（デザイナー）

2004年に設立したグリーンバレーは、2023年度20年目を迎えました。そんな節目の今年度は「人」の動きがたくさんありました。新事務局長として作田さんが就任し、神山出身の若手・中川さんが組織の一員に。そして、事務局メンバー3人が理事を兼任する新体制の運用とたくさんの新しい試みが手探りながら始まっています。今号では、ガラッと変わった組織運営について皆さんにお届けします。（安達）

新しい組織づくり

安達（以下、安） どんな経緯で3人が理事会に入ることになったんでしょうか。

伊藤（以下、伊） 理事の話が上る少し前に、自分から「僕も理事会に入れるけど」って言ったと思います。

多分今まで、立ち上げメンバーの「阿吽の呼吸」で理事会が動いてたとこがあるんじゃないかなって思います。

でも、ここ数年グリーンバレー（以下、GV）がやってることは、事業としても大きくなっていて、もちろんこれまで通りのやり方でうまくいくこともあるけれど事務局で専門にやっているメンバーも理事会に入った方が、より建設的な話し合いになることも多いだろうなと思って、このような形を提案したんです。

作田（以下、作） そうですね。昨年度までは事務局長は理事じゃなかったんですよね。理事会が決めたことを、事務局が執行するという関係でした（「GV組織図」右ページ）。それはつまり、組織として何かを動かそうとした時、共有される意思は、理事会の決定であって、事務局の決定ではないということになる。そうすると、理事会側に責任が全部あることになってしまうんですけれども、理事会は現場を動かしてるわけではないので、実際責任を持てないこともある。

現場に対してきちんと責任が持てるような理事会にならないといけないだろうというので、現場の事務局メンバーが理事会に入っていくことにしました。

それから、まちの環境変化のスピードが速くなっていて。現場の人が意思決定の場にいないと、理事会が現場感覚のある意思決定機関にはならない。意思決定をする役割の人と現場の役割の人が密に連動できるようになればと思います。

工藤（以下、工） それで言うと、事務局から理事会へ事前に議題を上げることも始めて、事務局の声も一緒に伝えられるようになったかなと。

あとは、世代交代をしていかないとというのは、3人が共通して感じていることかもしれないですね。

変わらないグリーンバレーらしさ

安 私自身まちの変化も、組織の変化もすごく感じていて。まちの変化でいうとみなさんはどんなことを思い浮かべますか。

作 例えば、神山まるごと高専が開校したこと。「森の学校みっけ」や「ねっこぼっこ」、「まちの食農教育」ができたり。「さぁ・くる」がまちの中で導入されたりとか。そういった新しい動きが、コロナ禍が収束に向かっていく中で、ポコポコっとできてきたっていう変化がありますよね。

伊 移住の文脈で言うと、理事に入る事を意識したのは、GV で不動産業を始めることになったからで。

実際不動産業の免許を取ったら、空き家の売買や GV で物件を借りて改修してとお金がかかるケースが増えてくる。そういう時にスピーディーに意思決定するには、理事会の中に自分を入れてもらって直接話した方が、確実に情報共有ができると思います。組織としての内側の変化がまずありますね。まちの環境の変化だけじゃなくて、GV 自体の変化。

安 確かに。まちが変化してる中で、GV の役割も変わってくるんですかね。

作 どうでしょうね。例えば、「やったらええんちゃうん」っていう GV が使う言葉があるじゃないですか。それで、今の神山を見渡してみて、誰もが小さなプロジェクトをやりやすい地域になってるんだろうなと自分は感じていて。

それは、あゆハウスの高校生かもしれないし、移住したばかりの人もそうかもしれない。はたまた、地元の人がお店を開くとかっていうことは、その「やったらええんちゃうん」というマインドの延長線なのかなって思ったりする。

つまり、GV の上の世代がやってきたことって、人が「ちょっとやってみたいな」と思うことを「やってみようかな」って思ってもいいんちゃうん、ていう土壌づくりだったんだなと思って。

それが GV だけじゃなく、いろんな人に広がっていってるのが、今の神山なのかなって思っています。

そういう中で、「これから私たちがどんな役割を担い、何をしていくのか」っていうのは、私たちでまた考えながらやっていくのかなと思います。

工 私が、組織に入った16年前は、GV 理事＝神山アーティスト・イン・レジデンス（以下、KAIR）実行委員会のコアメンバーという状態で、将来的に GV としても KAIR としてもどう続いていくのかなっていうのはその頃から思っていました。

今回、理事メンバーに加わって、3人とも業務で手いっぱいの状態ではあると思うけど、その中で、GV として、できることをコツコツやっていくんだろうなと思いますよね。

伊 僕らが理事会に「入ったから変わる」じゃなくて、「変わっていくために入っている」のかなと。元々立ち上げメンバーが、ボランティアベースで活動を続けてきたにもかかわらず、ここまで広がったっていうのが GV のすごいところだと思います。

だけど、同じやり方で下の世代はできない。これからは、視察やコンプレックスの運営、不動産業できちんと収益面も整えながら、株式会社ではなくて NPO だからボランティア的な要素はゼロにはせず。引き続き変わるために試行錯誤を続けていくことが、グリーンバレーらしく、このまちで活動できる基礎になっていくのかなと思います。

応援される組織であるために

安 伊藤さんの「変わっていくために入った」っていう言葉が今回のキーワードなんじゃないかなって、今思っています。

伊 以前の GV は、理事個々人のキャラクターでみなさんからの応援を得られてたかもしれない。そこで得てきた信頼を、メンバーが変わっても得られるようにしたいですね。預かった会費や寄付も責任を持ってまちのために使える組織にならないと、会員になろうってなかなかならないと思う。

安 応援される組織ってどんな組織でしょうか。

伊 森づくり、アドプト、移住、空き家の相談・・・そこに参加してみようって思ってもらえるかどうか。応援の形はさまざまなのかなと思うけど。「信頼してもらえる組織」が応援してもらえる組織ってことなのではないかなと思います。

作 そうですね。あとは、面白いっていうことも大事にしたいなと思っていて。

GV って、面白い町、面白いことをしたいっていう純粋な気持ちで始まっていて。「面白い」っていう部分と、どうやって組織として持続できるようにするっていうのを両立させていく。その試みを今私たちがしていると思うんです。

どうしたら持続可能になるのかって、向き合いながら、考えながら、工夫しながら。両方ないとエンジンが進んでいかないので、そこは大事にしたいなと思っています。

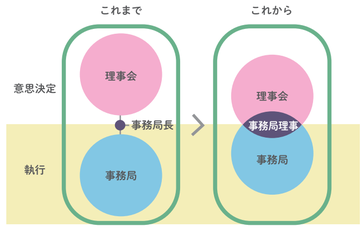
安 「面白いと思うこと」っていうのは、自分たちで作っていくのですか。

作 自分達で声を拾う場合もあるし、人から言われて「あ、そうやな」って思うかもしれない。最近でいえば、吉田さん（GV メンバー・移住担当）が『空き家のミカタ』をイン神山で連載してくれて、僕らは同僚だから面白いなと思って読んでる。でも、本当に吉田さんがコアな視点で『空き家のミカタ』をずっと書いてたら、出版社から執筆しませんかって依頼が来て。「あ、見てくれてる人はいるんだな」と思ったし、そんなふうに事業が展開していくことが今後もあるんじゃないかと思っています。

伊 ささいなことでも必要とされてる情報なんだなっていうのは、僕らも認識はできる。

NPO だから、一見利益になるかどうかわかんないことでも、手は伸ばせるところは確かにあるかなって。今までの活動の蓄積があっての話ですけど。

特に空き家や移住のことは、立ち上げメンバーの信頼という下地の上で活動させていただいてる。簡単にお金にはできないけど、逆に他の人が真似できないということでもある。いかにこれを活かしていくかってのは GV の面白さかもしれないですね。



「GV 組織図」

町、そして国境を越え広がる活動

小林（以下、小） 神山ってアーティスト・イン・レジデンスの先駆けだと思うんです。　近年の急速な変化の中で続けることこそ、本当に難しいことなのではと想像していて。アートに対して理解を得るのが難しい中、感じているやりがいってどんなことがあるんでしょうか。

工 これまで、アーティストにとって、より良い制作ができるようにと少しずつ環境を整えながらここまできました。それが彼らの制作にも繋がるし、出来上がる作品にも繋がっていく。

KAIR は、神山の中でも本当に小さな一部分で。それをできるだけ繋いで、繋いで、繋いできた。結果としてそれが、直接的ではないけど少しずつ神山の中の何かに繋がっているんだろうなと思っています。

KAIR のプログラムって、1999年から毎年開催していてまちの人も「またこの時期がきたな。なんか慣れてきてるな」って年間行事の一部のようになってきていたけど、コロナ以降3年ぶりの KAIR を2022年にした時に、鑑賞者の言葉ではっと思ったのが、「これまですごい贅沢な時間を過ごさせてもらってたんやなっていうのを実感した」って言ってくれて。

小 見る側も育っていたんですね。

工 そういう風に思ってくれてたんやな、なんか頑張ろうかなって思ったことはありますね。

作 工藤さんとまちの関係者との視察で、オーストリアのメディアアートのフェスティバルに行くことがあったんです。その帰りに工藤さんは、KAIR を経験したアーティストに再会しに行かれて。

ヨーロッパのアーティストたちが KAIR のことを知っているとか、経験してた人たちが何人もいる。工藤さんが向こうに行ったら、そういう交流ができることって、僕はアートに詳しくないけど面白いなと思うんですよね。

小 神山を越え、国境を越えてコミュニケーションが広がるとどんな展開があるのか楽しみですね。

工 やっぱり運良くいいアーティストたちと巡り合えていて。そこから彼らが、ただ自分たちが「これを作りたい」って来るんではなくて、彼らも神山で何か貢献できることはないかっていうのを探しながらきてくれるってところがあって。

作 一見繋がってなさそうなみんな同士が繋がり一体何が生まれるのか、みたいな。それが面白いじゃないですか。

感謝をお伝えできたら

小 最後に読者の皆さんにお伝えしたいことはありますか。

伊 事務局とか理事だけでやってるように見えてしまうけど、そうじゃないんです。関わることで、価値とか、経験とかを重ねられる組織として続けていけたら、グリーンバレーらしいかなと思って。会員の方、募集中です（笑）。

作 今日は「理事」っていう記号的な言葉で伝わってるような気がしていますが、中山さん、大南さん、岩丸さん、佐藤英雄さん、斉藤さん、ルーさん、杉本さん、山口さん。監事は、祝谷院（はごいん）さん、森さんと、めちゃくちゃ個性が豊かな方々で、バックグラウンドや物語をお持ちで。それをどうにか皆さんに伝えたいのですが、伝えきれてないのが今の GV の状況です。会報誌も年に1回しか発行できていないので、GVが人前に出る場というか会員の皆様にお会いする機会を作れたらなと思っています。

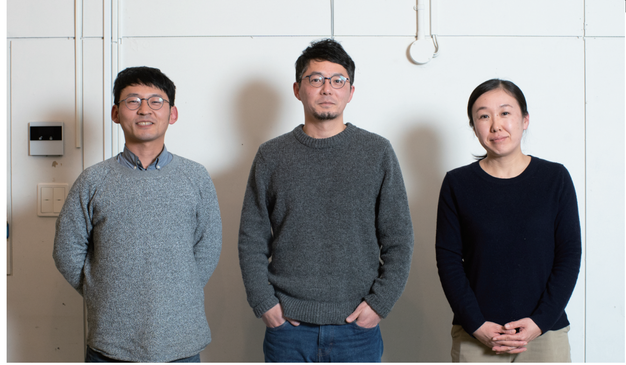
工 アートのプログラムで言えば、私たちスタッフが制作協力のお願いに行く前にアーティストと地域のおじいちゃんとですでに話がついているという場面があって。こんなふうに町の中で受け入れられていることが、本当にありがたいなと。皆さんに感謝をお伝えできたらと思っています。

事務局理事メンバー

左：伊藤 友宏
移住交流支援センター担当。奈良県出身。2013年神山へ移住、神山塾5期生。2015年4月より GV 参加。

中：作田 祥介
グリーンバレー事務局長。兵庫県出身。2017年神山へ移住。2022年 GV を手伝う。2023年4月事務局長就任。

右：工藤 桂子
KAIR 担当。徳島県出身。2007年より GV に参加。



若い人の言葉も聞いて幅広く意見を取り入れられる組織になったらええな。グリーンバレーの根っこは、「神山が好き」「神山をこんな場所にしたい」という気持ち。そんな気持ちのある人たちと、好きな神山をすてきにするグリーンバレーであり続けたいなあ。

NPO グリーンバレー理事
佐藤英雄さんより

【注釈】
・森の学校みっけ：「人と人」「人と地球」の繋がりを紡ぐオルタナティブスクール。神山町で２０２２年４月開校。
・ねっこぼっこ：３～５歳児を対象とした「お山のようちえん」。
・NPO 法人 まちの食農教育：２０２２年３月設立。「Community Supported School Lunch」を合言葉に、農体験と給食をつなげ、食を通じて世界を学ぶまちぐるみの「学校食」プログラムをつくっている。
・さぁ・くる：タクシー会社と町とが一体となり運営する『まちのクルマ Let's（レッツ）』とその乗車予約・乗車システム。
・吉田さんの「空き家のミカタ」：神山町移住交流支援センター吉田が綴る特集記事。